

連載

JCAM合格体験記

JCAMノススメ ～「AMS2.0」の時代にJCAM活躍の機運を高めよう！



文=赤坂 保彦 株式会社ニュージェック 経営戦略本部 研究開発部 研究開発グループ 研究開発チーム チームマネジャー
text by Yasuhiko AKASAKA

1. はじめに

JCAM (JAAM 認定アセットマネージャー) は、日本アセットマネジメント協会 (以下、JAAM と略す。) が認定する民間資格の一つで、アセットマネジメント (以下、AM と略す。) の経験や実績とともに、ISO 55000 シリーズの理解や実務的な視点など、AM に関する知識と力量を獲得していることを証明する資格であると理解する。以前より、AM の力量に関する資格については、CAMA (認定アセットマネージャー国際検定試験) が存在しているが、両者には以下のような明らかな違いがあると考えられる。

JCAM：AM の理解と実践経験が必須

CAMA：AM の理解と知識獲得が必須

つまり JCAM は CAMA と比較して、より実務に根ざした経験

と力量が必要な建て付けとなっているものと思われ、AM が真価を発揮するには、私見ながら JCAM のような実務的な資格を持つ技術者が、インフラメンテナンスの最前線で活躍することが重要であると思われる。

2. 志望の動機

私は社会に出て以来、一貫して橋梁に関する業務に携わり技術者としてのキャリアを積んできたが、その中で獲得した既設橋梁の点検や診断、耐震補強や補修・補強設計、そして長寿命化修繕計画立案などの、メンテナンスに関するスキルを証明する資格が存在しないことに“モヤモヤ”とした気持ちを抱いていた。

一方で、品質マネジメントシステムをはじめとする幾つかのマネジメントシステムに関わる機会を得て、ISO 50000 シリーズが企画

するマネジメントシステムとしての奥深さや大いなる可能性を感じ、橋梁のメンテナンスの現場で感じていた多くの課題を解決するためには、ISO 55000 シリーズの要求事項をベースに構築したアセットマネジメントシステム (以下、AMS と略す。) による、メンテナンスサイクルの確立が最も効果的であるとの考えに至ったものである。

その頃、タイミング良く JAAM から JCAM の創設に関するアナウンスがあり、自分の橋梁技術者としてのキャリアから得た AM に関する知識や知見を証明する機会を得たと考えたのが、私が JCAM の受験を志した動機である。

3. 受験の準備

JCAM の受験にあたっては、AM の実務経験が要件となっており、まずは自分が携わってきた業

務の「棚卸し」が必須である。自身の業務経歴を精査して、AMに該当する業務をリスト化し、要件となる経験年数を確保していることを確認する必要があるが、私はこの作業に意外に労力を要したことを記憶している。これからJCAMを目指す方は、日頃より自身の業務経歴をAMの観点で整理し、記録しておくことを強くお勧めする。

また、受験には事前にJAAMが主催する「事前対策講習会」を受講する必要がある。この講習会ではJCAM試験合格に求められる4つの視点、①国際的視点（ISO 55000シリーズ全般）、②実務的視点（ファイナンスや企業会計等）、③実務的視点（確率・統計学、リスクマネジメント）、④国内的視点（AMに関する施策動向）の多岐にわたる内容の解説がある。特に企業会計をはじめとして、技術者には馴染みのない内容も多いことから、受講後テキストを読み返しながらしっかりと復習して、合格に至るための知識を蓄えておくことが重要である。なお、この講習会は試験事務局より受講案内があるので、失念する恐れはないが、幾つかの候補日から予定の合う日程で受講しておく必要がある。

4. 試験対策

(1) 試験のあらまし

試験の内容は、予め受験要項に示される。現在は、私が受験したときと若干異なっているようだが、概ね以下の通りであった。また、私が実践した試験対策のポイントを簡単ながら後述する。

【一次試験】

午前：選択問題（120分）

午後：論述問題（120分）

【二次試験】

面接（約30分）

(2) ISO 55000シリーズの理解

一次試験の論述問題は、自身のAM実践業務の概要、ISO 55000シリーズの4つの柱（「目標に対する整合性」、「リスクマネジメントの実践」、「長期的・戦略的思考」、及び「全体最適のための意思決定」）のうち、1つの側面について振り返って課題分析を行うとともに、今後の自身がアセットマネージャーとして課題にどう対処するかを記述することが求められる。

よって試験に先立っては、ISO 55000シリーズの基本理念の理解が不可欠であるといえるが、他のマネジメントシステムと異なり、AMSが対象とするアセットの概念はかなり幅広く、私の場合は正直規格簡条を読み込んでも、“ピンとこない”ことが多々あった。幸いJAAMでは、ISO 55000シリーズの規格簡条の理解に役立つセミナーを定期的に開催しており、経験豊富な講師が規格簡条の文章の行間を読み解きながら丁寧に解説して頂く内容が中心となっていることから、これらのセミナーの受講が受験準備に大変役立った。ISO 55000シリーズの規格簡条の理解が心配な方は、自身の理解が進むよう是非このような機会を活用するのが良いと考える。

(3) 論文の用意

論述試験では、自身のAM業務の振り返りが求められる。これは、単に維持管理に関わる実務経験を証明するのではなく、ISO 55000シリーズの規格簡条の要求事項を正確に理解し、メンテナン

スにおける一連のサイクルにおいて、要求事項に対して自分がどのように理解してどのように対処したかを事前に整理し、AMSのPDCAサイクルに自身がコミットしたことを証明する必要がある。

そのためには、規格簡条と実務の作業フェーズを紐付けて、要求事項に対して「何が実現できたか」、「何が実現できなかったか」を整理するとともに、実現できなかった課題をクリアにして、アセットマネージャーの立場で実現に向けた方策を示すことが必須であり、この内容に沿った論文を予め作成しておくことが重要である。なお、先に述べたISO 55000シリーズの4つの柱のどの側面に関する内容を求められるかは、試験問題を目にするまで分からなかったため、私の場合は4つの柱それぞれに着目した4パターンの論文案を事前に作成して備えた。

5. 試験当日の留意点

試験は、受験者のPCをZoomでつなげて、メール配信される試験問題と答案用紙に解答を記載し、メールで提出する形である。自身が慣れた環境で受験ができる反面、午前と午後に各々二時間程度の試験に対応するため、時間的な猶予はほとんどないと考えた方が良い。

午前の選択問題試験の解答用紙はExcelで作成されており、解答数のチェックの仕組みや、自信がない設問解答に対して再考のリマインドができる仕組みが備わっていた。個人的な見解ではあるが、正答の自信の有無にかかわらず解答用紙を全て埋めてから、自信のない設問を再考するのが時間的な制約を克服する近道と考える。ま

た、どうしても確信に至らない場合には、実践経験に裏付けられた“心の声”に素直に従うことをお勧めする。

また午後の論述問題試験は、120分間で2つの設問に対し、2,500字程度で解答をまとめる必要があり、こちらも時間的な余裕はほぼなかった。論述問題の解答用紙は横書き原稿用紙スタイルのWordで作成されており、技術士試験のそれと類似し、ある意味懐かしさを感じた。私の場合は、まず予め作成した論文の構成を暗記するようにして、それに基づき解答用紙にタイプするようにして、何とか時間内に解答を整えることができたこと記憶している。

解答用紙を保存し、メールで事務局に送付すると試験監督が受信確認し、試験は終了となる。なお、解答用紙にはパスワードが設定されていたため、パスワードを記録して残しておくか、改めて解答用紙のパスワードを解除して自身のPCに保存しないと、あとで開けなくなってしまうため注意が必要であった。論述試験で作成した論文は、後の二次試験の面接時に内容を問われるため、試験後にレビューできるよう留意していただきたい。

そして、最後に「今後の試験」の流れの説明があり、一次試験は終了となる。

一次試験に合格すると、二次試験の案内と面接のスケジュールがある、面接は概ね30分で、Zoom上で複数の試験官から、自身のAMに関する業務の確認、ISO 55000シリーズの理解の確認と、選択問題の4つ視点に関する知識の確認があり、最後に自身の

アセットマネージャーとしての展望やAMの課題解決に対するサジェスションを求められた。試験官による質問は、非常に適切かつ鋭敏であり、一次試験が終了したからといって油断することなく、論述試験の解答を精査し、4つの視点に関する知識のブラッシュアップを図ることが肝要であった。

私が一連の試験を通じて感じたのは、JCAMとして求められる資質がとてもハイレベルなこと、また、いかにAMを理解して技術者として誠実に振る舞えるかを問われていたことで、とてもハードな試験であったことを今でも思い出す。

6. 今後の展望や目標について

JCAMに合格して約3年が過ぎ、早くも資格更新のお知らせが届く時期になったが、八潮市の下水道陥没事故等に代表されるインフラメンテナンスが抱える課題は、この数年で解消されるどころか、悪化をたどっているのでは?とも感じる。一方で自分のこの3年間を振り返ってみても、アセットマネージャーとして効果的な活動が思うようにできていないことにジレンマを感じているのも確かである。

現在我が国が置かれた状況は、人口の減少や少子高齢化の急激な進行、基幹産業の衰退などに起因する、ネガティブな因子が目白押しであり、「Trump2.0」に代表される不確実な国際状況の変化も鑑みると、これから「大変革の時代」が訪れることが、回避できない状況であると理解できる。

一方で、先般ISO 55000とISO 55001の定期改定がなされたことは記憶に新しいが、先に改定され

ているISO 55002とともに、規格箇条の要求事項も、より実務的で先進的な内容へと変革を遂げており、我々が構築し運用してきたAMSを、「AMS2.0」とも呼べる新たなフェーズへアップデートすることが、今後より実践的なマネジメントシステムとして活用するためには必要不可欠と考える。

ISO 55000シリーズは英国規格協会のPAS55をルーツに持つ、いわば“海外生まれ”の認証規格であるが、その目的は複数のステークホルダ間の調整により資産価値の最大化を実現し、社会全体がその価値の恩恵にあずかることを企図している。これは、奇しくも日本に古来より受け継がれる「三方よし」の理念に通じるものであり、我々日本人の道徳観や価値観によく馴染む仕組みであると確信する。「AMS2.0」を、世界が共有する価値実現のためのツールとして機能させてゆくのは、この「三方よし」の理念を受け継ぐ我々JCAMの不断の努力にかかっているといても過言ではないと感じる。

今後JAAMにはその司令塔として、JCAMが活躍する機運醸成の役割を期待するとともに、今回の私のJCAM合格がその一助となるよう願うものである。

最後に、本著が今後JCAMを志す皆さまの、お役に立てば幸いです。

あかさか やすひこ／埼玉大学工学部建設基礎工学科1990年卒業。1998年株式会社ニュージェック入社。3カ年の財団法人道路保全技術センター出向を経て現在に至る。プレストレストコンクリート橋の設計に従事後、橋梁の点検・診断、補修及び耐震補強設計に携わる。現在は社内の研究開発案件のとりまとめに取り組む。